



渡辺敏史の



サウンドコネクションでは、スネークビットとよばれる作業スペースを持ち、冷暖房が完備されクリーンに保たれている。作業に精密さと集中力が要求されるため、クルマとインストラー、どちらにとってもベストの環境をつくり出し、より精度の高い仕上がりをめざそうと製作された。他に類を見ない同社のこだわりでもある。

TOSHIFUMI WATANABE SOUND CONNECTION

車両盗難や車上荒らしから愛車を守るためになにをすべきか。その方法のひとつにカーセキュリティがある。最新アフターシステムとはどのようなモノなのか。そして車両盗難や車上荒らしの現状とは。

あ

る日、朝起きてみたらそこにあるべきクルマがない……というのではかなりドッキリするできごとだ。

じつはボクもいちど、そういう経験をしたことがある。といってもそれは徹夜つづきでじぶんがクルマを置いてある場所すら忘れてしまい、羽田空港の駐車場で散々探しまくったならんのは、隣のパーキングビルにいたというだけの話だ。が、そのときの胸にもやーっとこみあげてくる鈍い衝撃は忘れられない。仕事の流れだったとはいえ、それだけでなく狙われやすいRX7でそんな駐車場に行き、たった一夜と思いつつ放置してしまっただけという後ろめたさが尚更にその不安を助長した。以来、羽田はもっぱら京急である。

先日損保協会が発表した08年度の盗難車ベスト10をみると、走り屋的な銘柄は影を潜め、ハイエースやワゴンRといった銘柄が上位を占めている。海外需要がたくさんありそうなハイエースはまだしも、台数が圧倒的に多い理由以外にワゴンRが盗まれる理由はなんなのか。そして走り屋銘柄は若者だけでなくもはやクルマド口にも人気がなくなくなったのか。そのへんの話をうかがいに訪ねたのは、神奈川の和州市にあるサウンドコネクションだ。ここんちには、15年ほど前に取材で幾度か足を運んだことがある。社長の中村さんはクルマド口がこれほど問題になるはるか以前に、アメリカのカーセキュリティ

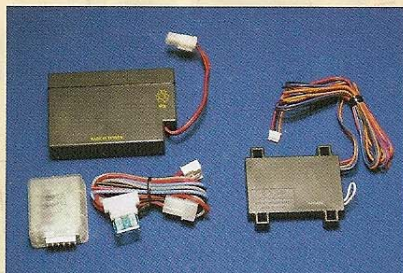


バイパーとシステム連動が可能なオプションパーツ「TERRA」。PHSシステムを使い、愛車の位置や状態を携帯電話でカクニンするとともに、セキュリティの遠隔操作も可能とするスグレモノだ。

ティシステムを積極的にアピールしていた、いわばクルマド口に触らせないクルマをつくるプロ中のプロだ。ひさしぶりに訪ねた今回は、そんな中村さんの弟子ともいえるヒデキさんがセキュリティのエキスパートとして取材に対応してくれた。

「走り屋向けのクルマが狙われなくなっただけというのには、ぜんぜんありませんね。絶対的な台数がすくなくなっただけで、相変わらず危ないですよ。ついでにこないだもS15がやられたって話を聞いたばかりです」。

やはり状況は変わっていない。我々がいまも愛してやまないシルビアや第二世代のGTR、とくにR32あたりになると「対ドロボー的にはもうカギなんてないようなもんだと思っただけが、いいですよ。ヤツらにしてみればスクーターみたいなもんじゃないから、マジでヤバイです」とのことだ。となれば、とうぜんFD3SもGC8もDC2も……と、90年代前半に仕込まれた子たちの脇は甘々ということになるだろう。思えばBNR34が日本車としてはいち早くイモビライザーを装備したのも、当時ランクルとともに盗難のターゲットにされたという経緯があっ



12Vバックアップバッテリーのセット。左上の黒いボックスがバッテリーで、これをどこかへ隠すようにして装着することにより、もともとクルマに搭載されているバッテリーの配線がカットされても、セキュリティが正常に作動するようにしておくことができる。

てのことだ。「そういう意味ではR35のセキュリティシステム、あれはしっかりしています。侵入センサーや傾斜センサーもついているし」。

R35のセキュリティシステムとは、イギリスの保険協会が設定する「サッチャム基準」に準拠したものだ。とうぜん車両保険料にも反映されるものだけに、その基準はかなりキビしいものとなっている。が、そのシステムは最上級のプレミアムエディション以外はオプション価格となり、26万円以上の費用をかけて装着するものだ。しかし万が一そのセキュリティの破りかたが発見されれば、すべてのサッチャムつきR35が盗難対象になってしまう……ということだろうか？

「そうだと思います。いくらいいシステムであっても、メーカーが新車にほどこす仕事である以上は、すべておなじプログラムと施工で装着されているでしょうからね。セキュリティはシステム構成自体ももちろんですが、それらを一か所にドロボーにわかりづらく、破られづらくするようにインストールできるかが重要なんです。だから我々の仕事の価値があるんです。だから我々